あきらめていた「家族旅行」を、もう一度。

Good Time

人生で一番輝くとき“グッドタイム”

稲次 正敬のグッドタイム

地域の安心を医療からサポート。”稲次村“と”僻地（へきち）“を支える真のドクター。

春山 満語録

第三回『若者よ、だまされるな！』/ 日に新た 日に日に新た 日に新た

【編集後記】僻地の医療を支える、リアル“Dr.コトー”

【言の葉】第二回『見守る医療』

03
2017.July

地域の安心を医療からサポート。“稲次村”と“僻地（へきち）”を支える真のドクター。

稲次 正敬の グッドタイム

学びの地『徳島県』で ゼロからの出発を決断

春山 哲朗（以下、春山） 稲次先生は兵庫県ご出身とお聞きしましたが、若くして徳島県で開業医となられた理由をお聞かせください。

稲次 そもそも僕の希望は大学での研究より現場に出ることでした。医者という仕事は体力的にも厳しいものですから、若いうちにいろんな経験を積んでおきたいという気持ちも強かったんです。一般的な流れですと医者が病院を開業するまでには、まず大病院での勤務経験を経てからの開業になります。大病院である程度、患者様と顔見知りになっておいて近くの地域で開業するほうが患者様も安心して来てくださいますしね。私の先輩や同級生が開業する際もそのパターンが多かったです。

一方、私は大病院などでの勤務経験が浅い時期での開業だったこともあったので、出身大学と同じ地域の徳島で開業することにしました。医者の世界というのは、縦の繋がりがとても大切です。先輩の力を借りなくてはならないこともいろいろあります。それには徳島で開業するのが一番かと。あと、妻が徳島出身ということもありましたね。

インターンに間違えられた 若き院長時代

春山　開業当初は、大変ご苦労されたとお聞きしました。

稲次　私の場合ですと、当時暮らしていた香川県からいきなり徳島県での開業でしたから、地域に馴染みの人がいなかった。ましてや私の稲次という苗字は非常に珍しいので「どこの誰だかわからないのが来たぞ」と身構えられた感じでしたね。それで、まず名前から覚えていただこうと。

　いざ開業した当時は若かったこともあり、患者様に院長だと思っていただけなかったことがしばしば。今では笑い話ですが、開業当時、患者様がタクシーで帰られる際、タクシーの運転手さんに「今日は院長おらんかったからインターンの先生に診てもろた」とおっしゃったらしいんですね。タクシーの運転手さんは私が院長であることを知っていましたから「いえいえ。ここの院長若いんよ」と患者様に説明してくださったとか。そんな状況でしたね。

病院の仕事に全身全霊を捧げることで育んだ地域との絆

春山　病院が軌道に乗るまで医師会にも入れなかったとお聞きしました。

稲次　そうですね。今と違って当時は若い医者が新規に開業するのが難しい時代でしたから。すぐには地域の医師会に加入することもできませんでした。でもまあ、医師会に入れなくてもやっていけるよと言ってくださった先生もいましたし、とにかく誠意をもって頑張るしかないな、と。それから24時間フルに働きましたね。8月23日の開業から12月末まで病院の敷地から出ませんでした。散髪もできないから髪の毛もぼうぼうで（笑）。というのも、知り合いの先生から開業に際していろいろと助言をいただいたなかに「顔が知られていない地域で開業するのだから、まず、稲次病院に行くと24時間いつも先生がおるよというふうに地域の人が知って、頼りにしてくれるようになるのが一番」というアドバイスがあったんです。新聞広告やチラシより何より、患者様の口コミが一番だから、とにかく年内は病院から出るな、と。それを守って4ヶ月は一歩も外に出ないようにしたんです。

　加えて、当時このあたりは救急体制が整っていなかったこともありました。私の病院には24時間院長がいるわけですから、救急隊員から「稲次病院に行ったらいつでも診てくれる」とたくさん救急も受けました。

　開業から1年間、地域の病院として粉骨砕身、働いた甲斐もあって県のほうから地区の医師会へ私の加入を支援していただくことができました。

「早く医療の現場に立ちたい」という情熱を胸に、若くして開業医というイバラの道へ。

稲次 正敬　Masanori Inatsugi
医療法人 凌雲会　社会福祉法人 凌雲福祉会　理事長 医師

● 昭和21年10月17日生まれ。趣味：旅行・ゴルフ。出身：兵庫県朝来市和田山町竹田（天空の城として有名な竹田城跡のふもと）。
昭和47年徳島大学医学部医学科を卒業し、医師免許取得。徳島大学医学部麻酔科、阿南共栄病院整形外科、高松赤十字病院整形外科勤務を経て、昭和53年8月23日、徳島県板野郡藍住町にて開業。
現在、医療・介護・福祉サービスを提供する医療法人凌雲会・社会福祉法人凌雲福祉会の理事長として活躍している。
＜資格・認定＞
日本整形外科学会専門医
日本リハビリテーション医学会専門医
日本体育協会公認スポーツドクター
労働衛生コンサルタント

「患者様第一」という理念のもと、患者様の思いに応えられる医療サービスを次世代とともに築きたい。

患者様の立場に立った医療サービスが信念

春山　先生が開業されてから、大事にされているポリシーは何ですか。

稲次　とにかく「患者様第一」に尽きます。患者様は来院されていざ、医師や看護師を目の前にすると10言いたいことのうちの1しか伝えることができないケースが多い。それは在宅患者様の往診をするとよくわかります。ご自宅での患者様は、よくお話しになるんですよ。10のところ10おっしゃらずとも、7つぐらいはお話しになる。病院だけで患者様と接していると、そんな患者様の気持ちが見えてこないと思うんです。だから、私が職員にいつも言うのは、「自分が患者になったときにしてほしくないことは絶対するな！」と。

　こうも言います。「徳島に医師はたくさんいる。そんななか、私どもの病院を選んで来ていただいているんだから、そのお客様にいかに満足していただけるかが大事。精一杯、自分ができることをやれ」と。これは私のモットーでもあり、医療に携わってきたときからの心づもりでもあります。

幼いころパジャマ姿で診察室で立ちすくんでいた娘2人も医師の道へ

春山　先生はお住まいも病院と同じ建物ですが、それには理由が？

稲次　家族の立場からすれば、やっぱり職場と家庭は分けたほうがいいのかもしれません。ですが、急患のことなどを考えたら、自宅と病院が同じほうが便利だな、と。24時間当直医がいるのと同じですから。

春山　そういった誠意ある対応で地域の信頼を得ていかれたわけですね。今でも夜間の急患を見られるのですか？

稲次　当直医もいるのですが緊急の場合、必要であれば私も出ます。地域の方の安全な暮らしを支える一端にはなったと思います。それはよかったのですが反面、気がかりなこともありました。私には娘が2人います。私は昼夜問わず呼び出されるし、開業当初は妻も一緒に夜中の急患のお世話をするという姿をずっと見ていたわけです。ある夜、気がついたらまだ幼稚園ぐらいだった娘2人が診察室に立っていたんですよ。パジャマを着て。「えっ！」と思ましたね。その後、深夜に急患が来て、妻が手伝いに出ようとすると「おかあちゃん、いかんといて！」と言うのが耳に入ったときは辛かった。この経験から、将来医者になるのは嫌だと言うかもしれないと思いましたね。幸い2人とも医者になってくれました。うちの娘たちにとって医療の現場を見て育つという生活環境がかえっていい教育になったのかな、と今では思えますが。

地域のニーズを超えたウォンツに応えたいという思いが形となった「稲次村」

春山　こちらの施設を私は勝手に「稲次村」とネーミングさせていただいています（笑）。理由は多岐に渡るサービスを半径約3km以内に充実させていることに僕は感銘を受けました。

稲次　実はやろうと思ってこうなったわけではありません。最初は、病院の隣に老人保健施設（以下、老健）をオープンしましたが、ここは徳島県で最後に認可が下りました。というのも、これからは老健が必要だと言う妻の意見に私がなかなか耳を貸さなくて出遅れてしまった。最終的に必要だということがわかったときには多くの老健ができあがっていた。ギリギリ、最後の最後で認可をいただけました。

次は、ケアハウスを中心とした訪問看護などを行う社会福祉法人を設立しました。地域でホームヘルプサービスや訪問看護ステーションなどのサービスが必要だと考えるようになり、この町の助役さんに始まり、担当の課長が一緒に県に掛け合ってくださったりして、本当に町と一体になって立ち上げました。北海道から鹿児島まで、日本全国の社会福祉法人、医療法人の施設を町の職員と一緒に視察に行き、こんなのを作りたいと意見を出し合いながら、作り上げていきました。地域にニーズがあったから私どもの施設の規模も大きくなっていった感じです。

若かりしころの体験から僻地（へきち）医療の現場へ

春山　先生はたとえば東京や大阪などの大都会で開業されようというお気持ちはなく、逆に僻地診療をされているとお聞きしました。

稲次　都会での開業はまったく考えませんでした。自分の目の届く範囲でできない仕事はしたくない。それには徳島県で手一杯ですね。「この地域の中で地域の人の生活を支えるんだ」を一番の理念にして今までやってきましたし、これからもやっていきたいですね。私は開業前、山の中にある診療所へ毎週アルバイトで通っていたことがあるんです。そのとき、僻地の在宅医療の必要性や厳しい現状なども患者様に教えていただきました。この経験から、僻地の診療は最終的な目標としてずっと心の中にあり、1年半前に県から僻地医療のお話があったとき「私でできるものなら」と快諾いたしました。いざ、やってみるとやっぱり大変です。徳島は道路事情が悪いものですから、行くまでが大変。向こうで患者様が待ってくれていると思うから、頑張って通っていますが。今は出羽島という離島と、陸の孤島といわれる地域の二か所に行っています。

春山　稲次病院での診療と僻地の診療は何が違いますか。

稲次　僻地というのは医者がいませんから、まず患者様は「医者に話を聞いてほしい」というお気持ちが強いんです。私もお話ししたりすることで安心していただけるんだったらと思い診察にあたります。それは、うちの老健でも同じ。患者様と手をつないだりもするんですよ。患者様とお話しして手を握ってあげて「先生これで元気もろた、もう治る」と言っていただくと、お薬よりもこれが一番かなという気もします。僻地診療も同じですね。

春山　最後に稲次グループの今後の展望をお聞かせください。

稲次　私は一代目ですので、好き勝手にどんどんやってきました。それを受け継いでもいいし、次の世代のやり方でやってくれてもいいと思っています。ただ、この地域で、稲次があるからみんなが安心して暮らせると思っていただけるような組織であってほしいですね。

地域から僻地（へきち）へ。
心通い合う医療サービスを目指して、まだまだ走り続ける。

春山 哲朗

編集後記

僻地（へきち）の医療を支える、リアル”Dr.コトー“

朝8時20分、徳島県の牟岐（むぎ）港発、出羽島行きの連絡船に乗り込む数名の乗客。その中に大きなカバンを背負い、手にはははちきれそうなトートバックを持つ男性がいる。この方が僻地の医療を支えている医療法人凌雲会の稲次理事長だ。今回の取材にあたり2度僻地診療へ同行させていただいた。

僻地診療と聞くと真っ先に出てくるイメージは、テレビドラマとして放映された”Dr.コトー診療所“。十分な医療が行き届かない僻地の島や陸の孤島と呼ばれている場所へ毎週水曜日と金曜日に行かれている。少し話は変わるが弊社創業者であり父でもある春山 満も京都大学の医学部を目指していた。祖父から医者になれと言われ勉強していたようだ。医者になったら大病院より医療の行き届かない僻地で開業したかったと聞いたことがある。今回、稲次理事長に同行し強く感じたことは、医療があるからこそ僻地の方は住み慣れた地に安心して住み続けられるということ。以前は病気になると出羽島から船で渡り診療を受けていた。今では稲次理事長が到着するや否や島民の方が一人、二人と自転車に乗って来られ、診療を受けられている。診察室からは柔らかな徳島弁で話しかけられる稲次理事長の声が聞こえる。患者様の不安を取り除きながら、島での出来事なども聞かれている。患者様からの相談には真剣な眼差しで応えられ、時に満面の笑みで日常の会話を楽しまれている。

医療とは医療行為を行い身体の健康を支えるだけでなく、患者様の心も支えることで、それがいかに重要かを改めて感じた。医療も介護も公的な保険事業で成り立っている世界ではあるが、お客様（患者様）に選ばれる健全なサービス業でなければいけないと僕は考えている。徳島県藍住町では稲次整形外科病院を運営され、その半径約3kmの範囲で、ニーズを超えたあらゆるウォンツを医療、介護のサービスにして提供されている。

地域を支え、僻地も支える”真のドクター稲次 正敬“。生意気な表現かもしれないが、日本が誇るべきドクターの一人であると僕は確信した。

春山 哲朗
株式会社ハンディネットワーク インターナショナル
代表取締役

●1985年、春山 満の長男として生まれる。高校を卒業後ハワイの大学へ留学。その後、アメリカ ネバダ州のUniversity of Nevada, Las Vegasへ編入。2007年、春山 満からビジネスを学ぶため、（株）ハンディネットワーク インターナショナルへ入社。2012年、同社 取締役に就任。2014年、代表取締役に就任。MBSラジオ「失くしたものを数えるな！大丈夫や～!!」のパーソナリティを務める。
2015年、新事業「グッドタイム トラベル」のサービスを開始。
著書に「脳から血～でるほど考えろ!!」（週刊住宅新聞社）、「若者よ、だまされるな！」（週刊住宅新聞社）がある。

ホームドクター田村 学の

言の葉

第二回 見守る医療

医療は当然のことながら、人を治療し苦しみを減ずることを最優先して行う行為だ。しかしながら治療することが、かえって苦しみになることもあるのではないかと感じ始めた時から、治療こそ積極的に行わないが、見守ることで安心感を提供できる在宅医療を始めた。今年で9年が経過する。在宅にて診させて頂く多くの患者さんは癌末期、認知症、神経疾患にて通院が困難な方々で、見守るとはいっても、モルヒネを使った緩和医療、人工呼吸器の管理、高カロリー輸液の管理などは希望されれば対応する。癌末期の方々とのおつきあいの期間は短いことが多いが、認知症、神経疾患の方々の中には長期間ご縁のある方もおられる。ここで紹介させて頂く方は舞踏病という難病で意思疎通が次第に困難となり、寝たきりとなり、食事も口からは摂取できなくなり胃瘻を増設し、今日まで5年間、在宅医療を行っている。息子さんの手伝いもあり、奥様がキーパーソンとして、介護士、看護師の力を借りて一日、一日を大切に過ごされている。生活をより充実した日々とするために、年に1回、ご家族でハワイへ旅行されリフレッシュされている。勿論、ご主人もご一緒だ。日本を離れると日本の医療保険は使えず、発病の際には現地の病院を自費にて受診しなければならないというリスクはあるが、小生の記載した英語と日本語の診療情報提供書をお守り代わりに持参され、これまで9回行かれている。幸い診療情報提供書を使用するような場面はない。車いすでの移動、胃瘻から経管栄養食注入、排便排尿の管理とさぞかし大変だろうと思うが、例年、ご家族は楽しまれ、ご本人はとても喜ばれ元気になって帰ってこられる。往復の機内でも胃瘻より栄養を注入されるが、CAの方々が快く手伝ってくださるし、現地でも多くの方々のサポートがあり、障害者とともに旅行するからこそ得られる有難い人のやさしさをいつも経験されている。奥様も年を重ねられ、少し弱気になっておられるが、今年もまた、旅立つ計画を一生懸命、練っておられる。そういう時が一番幸せなのだろう。そこにはあまり医療は顔を出さないほうがよい。

田村 学
医療法人学縁会　おおさか往診クリニック
理事長

●1989年 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
1992年 マサチューセッツ州立大学メディカルセンターアシスタントプロフェッサー
2001年 大阪大学医学部耳鼻咽喉科准教授
2008年 おおさか往診クリニック開設
2009年 日本在宅医学会理事
2010年 大阪大学医学部臨床教授
著書：『風になった医師』
『End-of-Life Home Healthcare in Japan』

春山 満語録

Mitsuru Haruyama's message

第三回

『若者よ、だまされるな！』

一番弟子とドラ息子の運命も変えた。
カリスマ車いす社長、魂のメッセージ。

日に新た 日に日に新た 日に新た

ここに気づいたら、怖いものなんて何にもないよ、勇気が出るぜ。

03

もともとは中国で生まれた教え。ただ、言葉が非常にやさしい。やさしい言葉というのは、マジックがあるんですね。日に新た、今日という一日が始まる。日に日に新た、今日という一日は、たった一日だけの命の、まったく新しい一日なんだ。そして、日に新た、今日という一日は、昨日をひきずった連続の終わりではなく、明日へつながるかけ橋なんだ。

僕はこの言葉を、ことあるたびに自分のなかで念じる。くよくよしたくなると、念じるようにしている。「さあ、今日を生きよう。そして、明日を夢みよう。憧れを持って、今日また、しっかりと近づいていこう」。毎日毎日、この気持ちを生涯持ち続けたいと思う。亡くなる臨終のその日まで、石坂泰三はこの言葉を唱えたという。

そんな人生でありたいなあ。今日に満足せず、明日を夢みて。ただ、今日があるから、明日につながる。人と比較せず、泣き言を言わず、人がどう見るかなんて気にしないで、自分の憧れを持って今日を生きる。これが命だよ、これが人生だよ。ここに気づいたら、怖いものなんて何にもないよ、勇気が出るぜ。

（週刊住宅新聞社刊「若者よ、だまされるな！」より抜粋）

『若者よ、だまされるな！』
発行／週刊住宅新聞社
2012年初版発行
定価／本体1500円＋税

春山 満
株式会社ハンディネットワーク インターナショナル　創業者

● 24歳より進行性筋ジストロフィーを発症し、30代後半には首から下の運動機能を全廃。1988年、全国初の福祉のデパート「ハンディ・コープ」を開業。1991年、ハンディネットワーク インターナショナル（HNI）を設立、介護・医療のオリジナル商品を開発・販売する。幅広いネットワークと、体験を通した独自の視点と着眼で、大手医療法人の総合経営企画・コンサルティング、企業や自治体のプロジェクトに数多く参画。2003年、米国ビジネスウィーク誌にて『アジアの星』25人に選出。2005年、オリックス不動産（株）と共同出資し、高齢者住宅運営会社オリックス・リビング（株）を設立。2007年、公益財団法人国家基本問題研究所評議員就任。2008年、ハワイシニアライフ協会 名誉理事就任。自身がパーソナリティを務めたMBSラジオ「若者よ、だまされるな！」は日本民間放送連盟賞 近畿地区 ラジオ教養部門 最優秀賞を受賞。2014年、進行性筋ジストロフィーによる呼吸不全のため60歳で永眠。

主な著書に「僕にできないこと。僕にしかできないこと。」（幻冬舎）、「若者よ、だまされるな！」（週刊住宅新聞社）、「僕はそれでも生き抜いた」（仁パブリッシング）など。

グッドタイム トラベルがおすすめする「厳選クルーズ」

プリンセス・クルーズ（横浜港・神戸港 発着）

思いのままに、わがままに。非日常の空間でリラックス&リフレッシュ。

大海原の景色を眺めながら、日常を忘れて楽しめる様々な施設をご用意。心地よい潮風を感じるジャグジーやスパでリラックスすれば、身体の中からエネルギーが満ちてくるのを感じることでしょう。開放的な屋外プールでスイミングはもちろん、デッキチェアで日光浴、ジャグジーでドリンクなど、楽しみ方はいろいろ。更に、ロータス・スパではフェイシャルや全身マッサージをはじめアロマストーンセラピーなど、最先端のメニューで癒しの時間を体感できます。フィットネス・センターではエクササイズマシンのほか、ピラティスやヨガなどのスタジオプログラムを開催しています。

心躍る大人の時間。開放的なスペースで上質なひととき。

船内とは思えない3層吹き抜けのアトリウムではパーティーが開催されることもあります。プールサイドでは、星空の下で心地よい海風を感じながら大型液晶スクリーンで名画や最新映画、ライブ上映などをご鑑賞いただけます。そして、バンドの生演奏やスポーツ観戦を楽しめるバーが14箇所も。ダンスができるラウンジでは、様々なパーティーやイベントを開催。大人の社交場として親しまれています。更に、外国船でしか体験できないカジノやショッピング（免税）など、プリンセス・クルーズだから体験できる特別な夜が、あなたを待っています。

安心のバリアフリー

船内の車椅子対応客室は27部屋あり、エレベーターに一番近く、室内は車椅子でも十分に動き回るスペースがあります。お手洗いには手すり、またシャワールームには補助椅子も設置しています。乗下船時は、専門スタッフがお手伝いさせていただきますのでご安心ください。

24時間の医療体制

医師、看護師（日本語対応）が常に待機し、24時間の医療体制が整っています。万が一の緊急の手術があった場合に備えて手術室もあります。(全ての手術に対応できるわけではありません。緊急下船をしていただく場合もあります)
※海外旅行保険の加入をお勧めします。

「Good Time」定期お届け便のご案内

「Good Time」は7月、12月の年2回発行いたします。是非、定期お届け便をご利用ください。店舗や施設の待合スペースでの設置も可能です。ご希望の方はご相談ください。

■お申込み方法

TEL 072-725-3388
FAX 072-725-3088
メール goodtimetravel@hni.co.jp

定期お届け便 無料

お届け先のお名前・ご住所・お電話番号をお知らせください。
※お客様の個人情報は、厳重に保管・管理しております。お客様の承諾を得た場合を除き目的以外での利用はいたしません。

「グッドタイム トラベル」とは…

「グッドタイム トラベル」はお客様のご要望にお応えする完全オリジナル企画旅行です。お客様やご家族だけでなくかかりつけのドクターやケアマネージャーの意見も反映させ、安心してご家族皆様に楽しんでいただける旅行をプランニングします。さらに、ケアスタッフ（トラベルケア アテンダント）を同行させていただき、ご家族の負担を取り除くとともに、介護を受ける方もご家族に気兼ねなく楽しんでいただける旅行を実現します。

トラベルケア アテンダント Travel Care Attendant（TCA）

介護職員初任者研修（旧ヘルパー2級）以上の資格を持ち、「グッドタイム トラベル」の教育プログラムを修了した介護のプロフェッショナルです。

Handi Network International

発行・編集
株式会社ハンディネットワーク インターナショナル
〒562-0014 大阪府箕面市萱野4-3-10 3F
TEL.072-725-3388 FAX.072-725-3088
http://www.hni.co.jp

発行人・編集人／春山 哲朗
編集協力／沖本 康弘（(株)オーツー）
春山 龍二（(株)オーツー）
取材協力／医療法人 凌雲会

デザイン・イラスト／波多野 悠
撮影／藤倉 康一
総合アシスタント／北村 京子（(株)HNI）